

少ない。神戸のお話の患者さんは病状が分らないが一般論としては妊娠継続に問題なく、ジギタリスも必要ない場合が大部分と考える。心房中隔欠損症の手術はかなり安全で実用的な手術で、手術後は殆んど全治と考えてよいが、心臓疾患の手術がすべて全治を齎らすものではない。心疾患の種類と術式によりかなり差があり、また、一人一人違う。殊に僧帽弁狭窄症の手術には全治はないと考えた方がよい。妊娠、出産の問題もこのことを充分考慮して決定すべきである。妊娠中の心臓手術は原則として反対である。

31. 妊娠と糖尿病について (第1報)

(国立京都病院) 杉山 陽一, 赤沢 好温

最近わが国でも糖尿病合併妊婦は漸増傾向にある。私どもは妊婦検診の際血糖検査、GTTなどを行なっている。最近2年8カ月の間に64例1.82%の巨大児分娩を見たが、巨大児分娩群における尿糖陽性率は18.4%で対照群9.5%に比し約2倍である。最近2年2カ月の間に分娩した2,728例の中、外来診察中尿糖連続陽性のもの63例にGTTを行ない糖尿病専門外来に受診させた結果、overt型7例、chemical型6例、計13例0.48%の糖尿病型を見出した。この群では遺伝的素因のもの多く、巨大児の出生頻度高く、中毒症などの合併症も多くみられ、帝切も多く行なっている。borderline型26例では目立つ点は少ない。糖尿病型の母より出生した児の保育状態をみると、全て保育器に収容しある期間観察し保育に努めているが、体重増加は一般に緩慢で一部に生活力薄弱のため保育に困難なものがあつた。糖尿病型では分娩終了後多くは糖尿、GTTなどの改善がみられたが、その後も長期的監視が必要である。妊娠時のGTTの分析にあたっては非妊時の値をそのまま使用することに問題があり、今後検討を要する点と思われる。糖尿病妊産婦の管理・治療にあたっては糖尿病専門医との密接な連けいが必要である。上記症例では適切な食事指導により大部分妊娠末期まで無事に経過しえた。食事療法の原則として三大栄養素のバランス、ビタミンおよびミネラルの適正な補給、適正なカロリーと糖質量の制限などがあげられる。

質問

(熊本大) 中山 道男

1) Prediabetes または Potential diabetes つまり GTTでは diabetes と診断し得なくても CGTTで異常曲線を有する妊婦についてはお調べになつていませんか。

2) 近来注目されているThiazide induced diabetes

という中毒症合併の糖尿病妊婦を御経験された事はないか。

回答 (国立京都病院) 杉山 陽一

1) CGTTにつきましても調べておりますが妊娠という特殊状態も考慮して現在は主としてGTTによつて検討しております。

2) 現在のところ経験ございません。

32. 脂満症治療の遠隔成績

(熊本大)

森 憲正, 水元 淳一, 宮川 勇生

肥満症の一次的治療成績はよくなつたが、治療中止後の経過についての報告はきわめて少ない。われわれは今後の治療の参考とする目的で、これまで取扱つた症例の治療中止後の経過を追跡したので、その成績を報告する。昭和34年から42年までに受診し、肥満症と診断したものの中135例を対象として調査し、この中現在体重が明らかな62名について検討した。62例の中肥満症治療による一次的体重減少が10kg以上であつたものは19例であつた。44年9月現在の体重が初診時体重より増加していたものは62例中32例(51.6%)で、経過年数5年末満の40.7%に対し5年以上群では60.0%であつた。初診時体重への増加復帰例は一次的体重減少が小さい群に多く、15kg以上減少した8例では1例だけであつた。治療中止後さらに減少したものは6例であり、治療後の体重増加を5kg以内に抑えていたものは21例で、この中5年以上経過群25%、5年末満群44.5%であつた。10kg以上再増加したものは19例で、5年以上群37.2%、5年末満群では22.2%であつた。再増加率(再増加体重の体重減少に対する比率)が50%未満であつたのは19例であり、5年以上群の35例中8例(22.8%)、5年末満群27例中11例(40.8%)であつた。また再増加率100%以上が5年以上60%、5年末満44.5%であり、一次的効果が約半数では5年以内に失なわれており、肥満症治療には遠隔成績を良好にする努力が必要であることが判つた。

33. 妊婦の静脈瘤発生と胎児性別の関連性

(東京厚生年金病院)

松山 栄吉, 加藤 綾子, 今尾 貞夫
滝沢 栄子, 森 宏之, 種村健二郎

妊娠の合併症としてよくみられる静脈瘤のなかには、妊娠の初期ないし中期にすでに発現するものがある。われわれはこれら妊婦50例について観察を行なつたところ、静脈瘤の程度の高度のもの、あるいは鼠径部、外陰、腔壁などに発生した群では、産児は女児18例、男児